

・立花ぼとん（東京都）

ゆうれいの布のあまったとこに

書く

雪だるまは白い影がほしい

幽霊と雪だるま。似ているけれど、幽霊は影の者で、雪だるまは光の者という感じがする。影があれば、幽霊のようにもっと自在に振る舞うことができるのかも。

・あお（奈良県）

同じ曲ばかり聞いたらだめだよと

汽笛のようにおしえてくれた

注意喚起の合図である汽笛。ぽー、と鳴らし走り去ってしまう汽車のように、その人は同じ曲ばかりを聞かないから、たぶん前へ進んでゆけるのだろう。

・日下部 友奏（群馬県）

向日葵の花

リクガメの足の裏

ゴツゴツした鱗状の足の裏と、茶色い花芯の粒々。陽に向かって直立する向日葵の花がみなリクガメの足裏だったら。ほかほかと気持ちよさそうな奇想。

・小宮 颯人（東京都）

共感もカップケーキの崩れ方

薄いアルミのカップを剥がした途端、もろもろと崩れてゆくケーキ。そのように

共感という感情はたやすく獲得できる分だけ脆く、頼りない。

・桜庭 紀子（和歌山県）

枝毛には

パラドックスを

こめていて

痛んでいる、乾燥している、弱っている。枝毛にこめられたパラドックスを解くことができたなら、この世のからくりがもつとよく見えてくるはず。

・水嶋 理（埼玉県）

天王星に着いたなら

永遠にタオル畳もう縦の自転で

地球を脱出してほかの惑星に棲む日が来たなら。天王星は横倒しで自転しているため極では昼が42年続く。永遠に近い陽射しのなかで洗濯物を畳む未来。

・小里京子（北海道）

海溝の診察に行く聴診器

地震多発地帯である海溝周辺は、プレートの状態が日々観測されているのだという。人の胸にするように、海底の大きな胸部にあてた聴診器が聴く音を思う。

・りゅ（兵庫県）

泣き止んで

肘から先の感覚も

入道雲も

なくなっていく

泣き続けると身体先端が痺れるような、手脚が透けてゆくような欠落感がある。泣き止んで、入道雲も消えて、やがて静かな鱗雲の秋が訪れる。

・宮崎 莉々香（神奈川県）

夕立を鼻から動きそれは犬

雨の降りはじめのペトリコール。人間の三千倍以上の嗅覚を持つ犬は、雨をまず鼻から知るだろう。知ることは世界のはじめ。犬は世界へ鼻から分け入ってゆく。

・牛腸 太志（高知県）

四分休符は近づきかず

閃いて、鳴る。光から音までの、視覚から聴覚までの、わずかなずれに休符が置かれている。全休符や二分休符だったさきほどまでの遠雷はすぐそこに。